

ダルマターシーラ考

原 田 覺

ここに採り上げるのは、チベットの吐蕃時代の「大校閲の翻訳師〔で〕大徳〔たる〕ダルマターシーラ Dharma tā śīla (Dharmatāśīla)」であり、西暦 814 年の編纂である『二巻本語合』*sGra sbyor bom po gn̄is pa* の前書では「チベット Bod の親教師 mkhan po 〔たる〕ラトナラクシタ¹⁾ Ratna rakṣita (Ratnarakṣita) と | ダルマターシーラ Dharmma tā śīla と | 翻訳師〔で〕学者に属するジュニャーナセーナ Dzñā nase na (イエシェデ Ye śes sde) と |」(注 1 註 1 Ishikawa p.1, ll.10~12) としてチベット人学僧の第二番目にその名前が挙がっている。また西暦 836 年の編纂であり、吐蕃時代に蔵訳した仏典の正式な一切経目録である『デンカルマ目録』*dkar chag lDan dkar ma (DK.)* は、ダルマターシーラが蔵訳したと見做し得る幾つかの仏典を記載している(注 1 註 2 参照)。ここでは、現存大蔵経との対照により、それ等の仏典を確定した上で、各仏典の現存大蔵経の奥書を調査することにより、この翻訳師の歴史像の一端を明らかにすると共に、この翻訳師を吐蕃仏教史の展開の中に如何様に位置づけることが出来るのか、その可能性について論ずる。

さて北京版の大蔵経 (Ped.) の著者名の索引には、該当する著者名を見出すことはできないけれど、訳者名の索引によるとダルマターシーラの翻訳として 9 種類の仏典と、翻訳師の蔵語名であるチュニツルティム Chos ñid tshul khrim̄s の翻訳として 2 種類の仏典とを見出す(注 1 註 3 参照)。従って、ダルマターシーラの翻訳仏典は般若部に属する Ped. No.734 と、宝積部に属する Ped. No.760 (12), (47) と、諸経部に属する Ped. No.795, 827, 846, 879, 932 と、中観部に属する Ped. No.5306 と、チュニツルティム訳の同じく諸経部に属する Ped. No.843, 897 との合計 11 仏典であることになる。

I. 上記の 11 仏典に対応するデルゲ版 (Ded.) の仏典は Ded. No.12, 56, 91, 127, 231, 160, 213, 176, 266, 179, 3910 であり(注 1 註 4 参照)、これ等の仏典の内『デンカルマ目録』に記載がある仏典は「I. 大乘の経蔵で般若波羅蜜多〔経〕の部類に属するもの」に属する DK. No.5 と「III. 大乘の経蔵で大宝積〔経〕

の十万の法門の品に属するもの」に属する DK. No.36, 70 と「IV. 大乘の諸経蔵」の内の「26 巻以下から 11 巻以上」に属する DK. No.77 と「V.10 巻以下」に属する DK. No.89, 97, 98, 103, 130, 141 の合計 10 仏典であり (注 1 註 5 参照), Ded. No.3910 の記載はないものの, 上記デルゲ版の仏典番号の記載順は『デンカルマ目録』の番号順に合わせたものである。

さて DK. No.5 は 8,000 頌 26 巻 200 頌 (24 巻 100 頌?) の『八千 [頌] 般若波羅蜜多 [経]』であり, 同仏典の奥書は「インド rGya gar の親教師 [たる] シャーキャセーナ Śākya se na とジュニャーナシッディ Dzñā na siddhi と大校閲の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ダルマターシーラ等 la sogs pa[s] が翻訳し了り且つ校閲し了って確定したものである || || (後伝期の改訂記あり) とある。共訳者のシャーキャセーナについては他に知る所がなく, ジュニャーナシッディは以下に検討する DK. No.130 の他に, ジナミトラ Dzi na mi tra と彼とイエシェデとで DK. No.209 を, シーレーンドラボーディ Śī len dra bo dhi と彼とシャーキャブラバ Śākya pra bha とイエシェデとで DK. No.329, 330, 333 を, シーレーンドラボーディと彼とイエシェデとで DK. No.334 を共訳しており, No.130 以外の奥書 5 種には全て「新 [欽] 定語 skad gsar chad (注 1 註 7 参照) によっても改訂し了って [から]」という記載があり『二巻本語合』の編纂に関わった「印度 Ñi hog [人] の親教師 [で] 阿闍梨 [たる]」(注 1 註 1 Ishikawa p.1, 1.9) ジナミトラとシーレーンドラボーディと共訳しているので, 814 年前後以降の時期に翻訳事業に携わったと考え得る。その意味では『二巻本語合』の前書に名前のないシャーキャセーナは 814 年には既に死亡していたか, 帰国したか, 或いは逆に 814 年以降に短期間入蔵した学僧であったかと考え得る。

DK. No.36 は 6,000 頌 20 巻の『菩薩蔵 [経]』であり, 同仏典の奥書は「インドの親教師 [で] 阿闍梨 [たる] スレーンドラ Su ren dra と | シーレーンドラと | 阿闍梨 [たる] ダルマタ [-] シーラ Dharma ta śīla が翻訳し了り且つ校閲し了って新 [欽] 定語によっても改訂し了ってから確定したものである || || とある。共訳者の印度人学僧が夫タスレーンドラ [ボーディ] とシーレーンドラ [ボーディ] を指すとするならば, この序列で『二巻本語合』の前書に記載がある (注 1 註 1 Ishikawa p.1, 11.9 ~ 10) ので, やはり 814 年前後の翻訳と見做し得る。

DK. No.70 は 900 頌 3 巻の『宝髻 [菩薩] 所問 [経]』であり, 同仏典の奥書は「インドの親教師 [たる] カマラシーラ Ka ma la śī la と | 大校閲の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ダルマターシーラが翻訳し了り且つ校閲し了って新 [欽] 定語に

よっても改訂し了ってから確定したものである || || とある。北京版の奥書では下線部の共訳者を落としている (注1 註3 参照) 一方で、共訳者である著名なカマラシーラは、同じく著名なティソンデツェン Khri sroñ lde btsan 王 (742-797) と相前後して非業の死を迎えたということである (注1 註6 参照) ので、恐らく「新 [欽] 定語」の制定があった814年との間に、約17年間の時間差があり「改訂」の時にわざわざカマラシーラの名前を残したのであるならば、ダルマターシーラがカマラシーラに嗣法した可能性が出てくるであろう。

DK. No.77 は4,500 頌15巻の『顯一切法自性平等 [月燈] 三昧王 [經]』であり、同仏典の奥書は「インドの親教師 [たる] シーレーンドラボーディと | 大校閱の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ダルマターシーラ Dharma tā śī la が翻訳し了り且つ校閱し了って | 新 [欽] 定語によっても改訂し了ってから確定したものである || || とある。また DK. No.89 は2,400 頌8巻の『宝雲 [經]』であり、リンチェンツォ Rin chen ḥtsho (ラトナラクシタ) と共訳しており「新 [欽] 定語」による「改訂」を記載していない (注1 拙稿参照)。

DK. No.97 は2,100 頌7巻の『勝思惟梵天所問 [經]』であり、同仏典の奥書は「インドの親教師 [たる] シャーキャブラバ Śākya prabha と | ダルマパーラ Dharma pā la と | ジナミトラと | 大校閱の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ダルマターシーラと | 版 par を校閱した翻訳師 [で] 大徳 [たる] デーバーンドララクシタ De ben dra rakṣi ta と | クマーララクシタ Kumā ra rakṣi ta 等が校閱し了り且つ確定したものである || || とある。共訳者のシャーキャブラバの翻訳は上述の DK. No.329, 330, 333 と、以下に検討する DK. No.98, 141 以外に、ラトナラクシタと共訳している DK. No.100~1 (注1 拙稿参照) と、イエシエデと共訳している DK. No.163 と、シーレーンドラボーディと彼とヴァイローチャナラクシタ Bai ro tsa na rakṣi ta と共訳している DK. No.493 がある。ダルマパーラの同仏典以外の翻訳は『デンカルマ目録』には記載がないようである。デーバーンドララクシタの翻訳には DK. No.188, 193, 294, 312, 377, 505 (Ded. No.4124; Ped. No.5626), 507, 590 (Ped. No.5232), 649, 650, 651, 652 等があり、シャーキャシンハ Śākya siñ ha, ヴィシュツグシンハ Bi śud dha siñ ha, ダルマーカー Dharmā ka ra, ヴイドゥヤーカラプラババ Bidyā ka ra pra bha ba, サルヴァジュニヤーデーバ Sarba dzñā de ba, ジュニヤーナガルバ Dzñāna garbha 等と共訳しており、その内 DK. No.193, 294, 312, 377, 507, 649, 651, 652 はその出身地をツァン rTsañ[s] / gTsañ と明示している。また「新 [欽] 定語」による「改訂」を記載する奥書が全くなく

「翻訳師 [で] 大徳 [たる]」或いは「翻訳師 [で] 比丘 [たる]」デーベンドララクシタが翻訳したものを DK. No.193 では「大校閲の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ルイゲンツェン Kluhi rgyal mtshan が大校閲をいたしまして確定し了」っており、DK. No.651, 652 では「大校閲の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ペルツェク dPal brtsegs が校閲をして確定し了」っているので、デーベンドララクシタはペルツェクの後輩となる²⁾。クマララクシタについて知る所はないものの、記載の序列からデーベンドララクシタの更に後輩となる。以上のことから、同仏典は本来ジナミトラとダルマターシーラが「確定し了ったもの」を、後にシャーキャプラバと、恐らくダルマパーラと、デーベンドララクシタとクマララクシタが翻訳し直して、下線部の部分を本来の奥書に書き加えたものと考え得る。その場合でも「翻訳し了り且つ」の句を落としていることになる。

DK. No.98 は 2,100 頌 7 巻の『利益央掘魔羅 [経]』であり、同仏典の奥書は「インドの親教師 [たる] シャーキャプラバ Śākya pra bha と | 大校閲の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ダルマターシーラと中国 rGya の翻訳師 [で] 大徳 [たる] トン Hoñ/Toñ 阿闍梨などが翻訳し了り且つ校閲し了って確定したものである || ||」とある。トン阿闍梨について知る所は何もなく、梵本の蔵訳に漢訳仏典を利用すべき必要が何かあったのであろうか。

DK. No.103 は 1,800 頌 6 巻の『無垢称所説 [経]』であり、同仏典の奥書は「頌は千八百であって巻は六なのである | | 翻訳師 [で] 大徳 [たる] チュニツルティムが翻訳し了り且つ校閲し了って確定したものである || ||」とある。インド人学僧の共訳者を落としており、インド人学僧とチベット人翻訳師が共同して翻訳を行うべしとする規定に反している (注 1 拙稿参照)。

DK. No.130 は 900 頌 3 巻の『[称揚諸仏功德] 華聚 [経]』であり、同仏典の奥書は「インドの親教師 [たる] ジュニャーナシッディ Dzñāna sid dhi と | 大校閲の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ダルマターシーラ等が大校閲を致し了って確定したものである || ||」とある。この奥書も「翻訳し了り且つ」の句を落としている。

DK. No.141 は 600 頌 2 巻の『説示世俗勝義諦 [清浄毘尼方広経]』であり、同仏典の奥書は「インドの親教師 [たる] シャーキャプラバと | ジナミトラと | 大校閲の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ダルマターシーラ等が翻訳し了り且つ校閲し了ってから確定したものである || ||」とある。この奥書もジナミトラとシャーキャプラバの序列を逆転しており、上述の DK. No.97 と同様の事情があった上で、

奥書文面に脱落が生じたものとすべきであろう。

プトン Bu ston (1290-1364) の『仏教史』は上記以外にもダルマターシーラの蔵訳仏典を記載しており、それは西岡 No.258 であり (注1註9参照), DK. No.93 に相当する 2,100 頌 7 巻の『無尽意 [菩薩] 所説 [経]』である。北京版は奥書を欠いており、デルゲ版の奥書は「大校閲の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ダルマターシーラが校閲し了り | 新 [欽] 定語によっても改訂し了って確定したものである || ||」とある。インド人学僧の共訳者と「翻訳し了り且つ」の句を落としている。

以上に見た如くダルマターシーラの翻訳は大乘經典のみであり、翻訳総量は 31,400 頌で 104 巻 200 頌となり、その内シーレーンドラ [ボーディ] との共訳が 10,500 頌 35 巻で全体の約 33% 強であり、ジュニャーナシッディとの共訳が 8,900 頌 29 巻 200 頌で全体の約 28% 強であり、ジナミトラ或はシャーキャプラバとの共訳が 4,800 頌 16 巻で全体の約 15% 強である。また「新 [欽] 定語によっても改訂し了」った翻訳が 13,500 頌 45 巻で全体の約 42% 強であり、上述の DK.No.97 のように改めて翻訳し直したもののあることや、現存の奥書に誤脱のある可能性を考えると、翻訳総量や「改訂」を受けた仏典数はより以上の分量であったとすべきであろう。

Ⅱ. 現存の西藏大蔵經に収載し『デンカルマ目録』に記載のない Ded. No.3910; Ped. No.5306 はヴィマラミトラ Bi ma la mi tra 造『頓入 [の] 無分別の修習義』であり、尾題に続く奥書は「インドの親教師 [たる] ダルマターシーラと | 大校閲の翻訳師 ([で] 大徳) [たる] イェシェデが翻訳し了り且つ校閲し了って確定したのである || ||」とある。吐蕃期に入蔵したインド人学僧ダルマターシーラについては従来報告がないので、奥書自体が偽作であり、著名なイェシェデの名前を借用していることから、恐らく彼の没後『デンカルマ目録』の成立した 836 年以降にこの奥書は成立したと思われる。既に報告³⁾したように同資料には『修習次第』三編と Pelliot tibétain (Pt.) No. 116 からの引用があり、Pt. 資料はチベット撰述文献であるので、ヴィマラミトラが著者である可能性は殆どないとするべきであろう。また『修習次第』三編は DK. No.606a~c であり、いずれもプラジュニャーヴァルマ Pradzñā varma とイェシェデ [等] が共訳しており「新 [欽] 定語」による「改訂」を記載していないので、少なくとも異訳の敦煌写本のある初編⁴⁾はイェシェデ [等] が新たに翻訳し直したもののようである。初編の敦煌写本は奥書を持っていないので、蔵訳の詳細は不明であるけれど、上述の如く若し

もダルマターシーラがカマラシーラに嗣法したのであれば、彼の翻訳である可能性が生ずると共に、偽作の奥書に彼の名前を借用した理由とも考えることができる。

Ⅲ. ダルマターシーラの名前は『二巻本語合』の前書に記載するティソンデツェン王代の翻訳師の名表(注1 註1 Ishikawa p.1, ll.17~20)中にその名を見出すことができず、吐蕃訳経史の諸事情から、ラトナラクシタの後輩でイエシェデの先輩であったと推定できるに過ぎない。794年に入蔵した(注1 註6 参照)カマラシーラに嗣法したとするならば、彼の活躍年代はそれ以降から814年をそう長くは隔たらない以後にかけての、9世紀最初の四半期を中心としていたとすることができる。「新[欽]定語によっても改訂し了」った翻訳が13,500頌45巻で全体の約42%強であることから、現存大蔵經に収載している彼の蔵訳仏典は814年に前後する短期間のものであるとして、大きな誤りはないであろう。また彼の蔵訳仏典が大乘經典のみであるのは、吐蕃の翻訳組織が「新[欽]定語」による翻訳に蔵訳仏典を統一するに当たって、恐らく大乘經典を最初に統一する順序付けをしたためであろう、と推定することができる。特にラトナラクシタ及び彼の蔵訳仏典は、吐蕃仏教にとって何等かの重要性を持ったとも推定できるけれど、その詳細については今後の課題としたい。

-
- 1) 拙稿「ラトナラクシタ考」『印度学仏教学研究』53-1, 日本印度学仏教学会, 東京, 2004(平成16)年を参照いただきたい。尚、紙幅の都合で省略した拙稿の注は、本稿と多くの部分で重複するので、以下に註として掲載する。 註1) 『二巻本語合』に対する筆者の基本的見解は拙稿「*Mahāvīyutpatti*の成立事情」『日本西藏学会々報』25, 同学会, 1979(昭和54)年を参照いただきたい。利用するテキストとしてはEd. by M. Ishikawa, *A Critical Edition of the sGra shyor bam po gnyis pa*, *Studia Tibetica* 18, The Toyo bunko, Tokyo, 1990, cf. p.1, ll. 10~11; 石川美恵『二巻本訳語釈——和訳と注解——』*Studia Tibetica* 28, (財)東洋文庫, 東京, 1993(平成5)年の前著を参照いただきたい。但し引用蔵語のローマ字転写と現代語訳は筆者のものに改めてある。また引用の行数は注記を除いて、本文のみの行数である。尚 dPaḥ bo gtsug lag phreñ ba, *mKhas paḥi dgaḥ ston* (*KhG.*), Śata Piṭaka Series (ŚPS.) 9-4, New Delhi, 1962, fol.132b3 は明らかに『二巻本語合』の前書を利用した文脈であるにも関わらず「チベットの親教師[たる]ダルマラクシタ Dharma rakṣi ta とダルマターシーラ Dharma tā śīla」として、ラトナラクシタの名前を誤っている。 註2) 『デンカルマ目録』の紹介研究には M. Lalou, *Les Textes Bouddhiques au Temps du Roi Khri-sroñ-lde-bcan*, *Journal Asiatique* 241-3, Paris, 1953; 芳村修基「デンカルマ目録の研究」『インド大乘仏教思想研究』百華苑, 京都, 1974(昭和49)年があり、仏典番号は Lalou 女史のものを依用する。また同目録に対する筆者

の基本的見解は拙稿「*lDan dkar ma* 目録考」『[田村芳朗博士還暦記念論集] 仏教教理の研究』(株)春秋社、東京、1982(昭和57)年を参照いただきたい。 註3) 著者名と訳者名の索引は『[影印北京版] 西藏大蔵経 [総目録・総索引]』165~168, (財)鈴木学術財団、東京・京都、1961(昭和36)年の「索引」を参照いただきたい。また北京版の仏典の奥書は大谷大学図書館編『[西藏大蔵経] 甘殊爾勘同目録』京都、1930~1932(昭和5~7)年に簡略に訳出しているため参照いただきたい。更に筆者は嘗て拙稿「吐蕃訳経史」『[講座・敦煌6] 敦煌胡語文献』(株)大東出版社、東京、1985(昭和60)年に於いて、吐蕃時代のラトナラクシタの翻訳に秘密疏部に属する仏典をも数え入れたが、誤りであり以下の本文の如く訂正したい。 註4) デルゲ版西藏大蔵経の目録は東北帝国大学法文学部編『西藏大蔵経総目録・総索引』仙台、1934(昭和9)年である。 註5) 『デンカルマ目録』記載の仏典をデルゲ版西藏大蔵経に比定し、その奥書を抽出したものに拙稿「*dkar chag lDan dkar ma* 考」I~IV, 『[国士舘大学] 教育学論叢』9~11, 13, 国士舘大学教育学会、東京、1991~3, 5(平成3~5, 7)年(未完)があり、ここではテキストとして拙稿IとIIを依用する。 註6) ティソンデツェン王については山口瑞鳳「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教研究所紀要』3, 成田山新勝寺、1978(昭和53)年を参照いただきたい。 註7) 新「欽」定語についての筆者の基本的理解は拙稿「*sGra sbyor bom po gnis pa* 考」『印度学仏教学研究』27-2, 日本印度学仏教学会、東京、1979(昭和54)年; 同(b)「縁起の蔵訳語」『東方』1, 東方学院、東京、1985(昭和60)年を参照いただきたい。 註8) 筆者が嘗て拙稿「漢文蔵訳仏典考——特にDK.No.267について——」『国士舘哲学』7, 国士舘大学哲学会、東京、2003(平成15)年に於いて、ラトナラクシタは「当然のこととしてインド仏教を学んだ学僧であり、漢文蔵訳の仏典の奥書に「大校閲」の役を果たす者として名前を出すのは、如何にも不自然である」とした点その他は、本文の如く再検討を要する。また同拙稿は上記のPed. No.904, 5494(DK. No.94, 537)の奥書の検討も行っている。 註9) プトン『仏教史』はEd. by. Lokesh Chandra, *The Collected Works of Bu-ston* 24, ŚPS. 64, New Delhi, 1971を依用する。また『仏教史』目録部の仏典番号は西岡祖秀『[プトゥン仏教史] 目録部索引』I~III, 『[東京大学文学部] 文化交流研究施設研究紀要』1981~3(昭和56~58)年に従い、西岡No.として示す。 註10) この前後の記述に関しては拙稿「*Sad mi drug* 出家考」*Sambhāṣā*4, 名古屋大学印度学仏教学研究會、1982(昭和57)年を参照いただきたい。但し拙稿に於いては、プトン『仏教史』の伝える伝承も「いずれにしても後代の付加」を受けたものとし、後述のパ=ティシエルキブ=ティシクが「印度仏教の導入にも重要な役割を果たしたかの如き諸伝承の混乱と発展」があったとする仮説を提示しており、本文の如くに訂正したい。 註11) 『バシェー』のテキストにはEd. by R. A. Stein, *Une chronique ancienne de bSam-yas: sBa-bžed*, L'Institut des Hautes Études Chinoises, Textes et Documents 1, Paris, 1961; 工布吉村編『[巴色朗著] 巴協』民族出版社、北京、1980年(同資料は西岡祖秀氏のご好意により入手した); 佟錦華, 黃布凡訳注『[坡塞囊著] 坡協訳注』四川民族出版社、1990年; Tr. & ed. by P. Wangdu & H. Diemberger, *dBa' bzhed: The Royal Narrative concerning the bringing of the Buddha's Doctrine to Tibet*, Philosophisch-Historische Klasse Denkschriften 291,

- Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien, 2000 がある。但し Stein 氏と佟氏のテキストは同一資料である。また Diemberger 女史は同資料中に縁起の旧蔵訳語があることを指摘している (p.12, fol. 18b1 細字; 注 7 拙稿 (b) 参照)。尚, 川越英真「rBa bshed の一考察——*mKhas pañi dgah ston* の引用を手がかりとして——」『『東北印度学宗教学会』論集』5, 同学会, 仙台, 1978 (昭和 53) 年を参照いただきたい。註 12) 山口瑞鳳「チベット仏教と新羅の金和尚」『新羅仏教研究』東京, 1973 (昭和 48) 年; 同「rin lugs rBa dPal dbyaṅs —— bSam yas の宗論をめぐる一問題」『『平川彰博士還暦記念論集』仏教における法の研究』(株) 春秋社, 東京, 1975 (昭和 50) 年を参照いただきたい。註 13) 拙稿「摩訶衍禪師考」『仏教学』8, 仏教学研究会, 東京, 1979 (昭和 54) 年; 注 10 拙稿を参照いただきたい。註 14) G. Tucci, *Minor Buddhist Texts* 2, Serie Orientale Rome 9-2, ISMEO., Rome, 1958 を参照いただきたい。但し筆者は本文に示す様にパ=ペルヤンとギャトウカガルケンを同一人物と考えているので, 注 1 *KhG.* の著者の見解 (fol. 103b4) に従って, 中国人とチベット人との二人のサンシが居たとする同氏の主張は採らない。
- 2) 拙稿「吐蕃に於ける僧伽と中観論書の蔵訳」『『江島惠教博士追悼記念論集』空と実在』(株) 春秋社, 東京, 2000 (平成 12) 年を参照いただきたい。
- 3) 拙稿「bSam yas の宗論以後に於ける頓門派の論書」『日本西蔵学会々報』22, 同学会, 東京, 1976 (昭和 51) 年; 赤羽律「Vimalamitra の *Rim gyis 'jug pa'i bsgom don* —— その特徴と問題について——」『日本西蔵学会々報』50, 同学会, 京都, 2004 (平成 16) 年を参照いただきたい。但し赤羽氏の主張は採らない。即ち同氏は, ヴィマラミトラの他の著作 *PHT.* に *Rim gyis 'jug pa'i bsgom don* (*Rim gyis.*) と並行する文章が存在することを指摘しているものの, 他の人物が *PHT.* をも引用して *Rim gyis.* を偽作した可能性を全く排除していないので, *Rim gyis.* がヴィマラミトラの真作であることを証明したことにはならない。また『頓入 [の] 無分別の修習義』(*Cig car.*) の首題の直前にある表題は, 後代の大蔵経編纂者が各仏典に付した略題であり, それを以って首題と尾題の真偽を議論するのは, 論証が逆転している。寧ろ同氏の指摘する *Rim gyis.* と *Cig car.* とに並行する文章が, 他の仏典からの引用でないとするならば, 同一の著者による偽作である可能性を論ずるべきであろう。
- 4) 拙稿「敦煌本 *sGom rim dan po* 考」『日本西蔵学会々報』28, 同学会, 東京, 1982 (昭和 57) 年を参照いただきたい。

〈キーワード〉 ダルマターシーラ, ラトナラクシタ, デンカルマ目録, ヴィマラミトラ
(国士舘大学教授)

from the *Yogācārabhūmi* and the Sautrāntika's *Abhidharmakośabhāṣya* in its criticism of the Sarvāstivāda school's theory that dharmas exist in past, present, and future.

85. The Role of Monks, Nuns, and Laity in the *Āṅguttara Nikāya*: 'the excellent disciples' in the Etadagga vagga

Bunchird CHAOWARITHREONGLITH

In the Etadagga vagga of the *Āṅguttara Nikāya* (AN. 1, pp. 23-26) appear many names of "the excellent disciples" — those who possessed special skills or characteristics. For example, Sāriputta was renowned for his profound wisdom. The excellent disciples include not only monks, but also nuns and laity. We find two other Chinese texts which correspond to the Etadagga vagga. They are the *Ekottarika Āgama* (T. 2, pp. 557a-560c) and *Aluohan jude jing* (阿羅漢具德經) (T. 2 pp. 831a-834b). The three sources do mention these excellent disciples, although the numbers of excellent disciples mentioned differ. However, after a comparative study on the excellent disciples' names and skills, it can be said that these texts belong to the same origin.

In addition, the *Manorathapūraṇī* and the *Fenbie gongde lun* (分別功德論), the commentaries on the Etadagga vagga and the *Ekottarika Āgama* respectively, include life stories of these excellent disciples, and they are also based on the same original source.

The stories of the excellent disciples exemplify the ideal Buddhist community where, as pointed out in the Etadagga vagga, monks' and nuns' role is to transmit Lord Buddha's teaching to the next generation, and laity's role is to give the Buddhist order their support.

86. A Study of Dharmatāśīla

Satoru HARADA

The *dkar chag lDan dkar ma* (A.D. 836) mentions 11 Tibetan translations of the Buddhist scriptures, which are translated by shus chen gyi lo tstsha ba

ban de Dharmatāśīla who is one of the compilers of the *sGra sbyor bam po gñis pa* (A.D. 814), namely Lalou No. 5, 36, 70, 77, 89, 93, 97, 98, 103, 130, 141. In this paper, I examine these colophons in the Tibetan Tripiṭaka, together with sDe dge edition No. 3910; Peking edition No. 5306 which is not mentioned in the *lDan dkar ma*. In conclusion, it is clear that Dharmatāśīla lived ~794~797~814~, and his Tibetan translations, which are in existence today, were translated around A.D. 814.

87. *sNañ bcas pa* and *sNañ med pa*

Mamoru KOBAYASHI

“*sNañ bcas pa*” and “*sNañ med pa*” are the divisions of Indian Mādhyamikas, which were posited by Roñ ston Śākya rgyal mtshan, a Sa skya pa master. “*sNañ med pa*” is defined as follows: those who accept the fact that the nonconceptual wisdom of an *ārya* cognizes, in the deepest phase of meditative equipoise, only the reality (*dharmatā*) such as “emptiness (*śūnyatā*)” without appearances of conventional objects. The representatives of *sNañ med pas* are Mādhyamika masters such as Bhāviveka and Candrakīrti. “*sNañ bcas pa*” is defined as those who accept the fact that the nonconceptual wisdom of an *ārya* arises in the above-mentioned phase, cognizing appearances of conventional objects, with the aspect devoid of intrinsic nature. The representatives of *sNañ bcas pas* are Ārya-Vimuktisena and Haribhadra, who are famous for their commentaries on the *Abhisamayālaṃkāra*. Haribhadra’s commentary is one of the sources for the arguments of Roñ ston, but he inherited, in actuality, many interpretations from his master, gYag phrug Sañs rgyas dpal. As for the later developments, śākya mchog ldan, a disciple of Roñ ston, dealt with the problems of the two divisions at some length. sTag tshan lo tsā ba showed that Hari-bhadra was well known as a *sNañ bcas pa* master at least in the Sa skya Madhyamaka tradition. On the other hand, Dar ma rin chen, a dGe lugs pa master, criticized the views of Sa skya pas.